

シンポジウム

私のまちづくり・仕事おこし

<パネリスト>

- 高家章子：高家領水車母さんの会「森のそば屋」・創夢長
- 上町祐隆：岩手高齢者福祉生活協同組合・事務局長
- 桂田静枝：労協一関地域福祉事業所ケアホームなごみ・所長
- 斎藤倫史：元岩手日報論説委員

<コーディネーター>

- 富田孝好：日本労協連センター事業団東北事業本部・本部長

水車小屋とそばに大きな夢を託して

高家章子（高家領水車母さんの会「森のそば屋」/創夢長）



先ほど創夢長とご紹介がありましたが、これはうちの夫が付けた名前です。次から次へといろんな小さな夢から大きな夢までが風船のようにどんどん膨らんで、我慢のできない状態になっていました。

そば屋をやってしばらくしてからは「みち草の驛」という喫茶・売店を開店しました。そのときは銀行に行ってもお金は貸してくれませんでした。今ではどんどんつくってくれと頼まれるほどのお店になりました。補助金をもらえば楽ですので、もらえるものはもらった方がいいです。しかし役所を動かすのは並大抵ではありません。時間もかかります。そのお金が無くなったときには、誰が責任取るのか、赤字になったらどうするのかと喧嘩が始まります。

そこで私たちは役所の力は一切借りず、自己資金だけでスタートしました。そしてお金がたまったら修理・増築するんです。食

「まちづくり・仕事おこし」を考える盛岡市民集会

器を揃えていくんです。今話すことがみなさんのお力になればいいと思って今日はここに来ました。私はただの主婦ですが、本気になって自分たちのこの足で、この口で、この心で地域を動かした思いをお話したいと思います。

平成4年に「森のそば屋」は開店しますが、その前に地域のことをお話します。うちの地域というのは昭和34年に電気がつき、水道はまだ20年たっておりません。そうした夢も膨らんでいない地域の中で、おばあちゃん、お母さん、お父さんたちの心を動かしていくのは並大抵ではありませんでした。

正直10年かかりました。村八分になって役員会の連絡が来なくなったということもありました。それほど封建的な地域でした。そのお母さん、おばあちゃんたち1人ずつに、「私と一緒に第二の人生を歩んでみませんか。」と呼びかけたんです。若いお母さんに呼びかけても信じてもらえなかったり、また私たちの思いについてきたくても、その家族が「損をしたらどうするんだ、何されるんだ」とこの会に入るのを許してくれなかったりしました。本当は私たちの思いは自治会としてやりたかったのですが、それはあまりにも反対が多くて無理でした。

そういう中で私たちは「母さんの会」をつくるのに水車組合のお父さんを集めました。本当に封建的で、奥さんを使って亭主閑白で威張っているようなお父さんたちでしたので、こんな田舎に誰がそばを食べに来るのかと信じてもらえませんでした。しかし、いつきても打ちたてのそばが食べられるようなお店をつくりたいと説明したところ、

ついにやらせてみるべと1人のお父さんが言ってくれました。そのときのお父さんたちは、どうせ3日ともたないだろう、やってみてダメならばこいつら夫婦はあきらめてくれるだろうという思いからだったようです。

平成4年8月8日にうちの自宅において母さんの会を開きました。そしたらみんな時間通りに集まってきました。開店当時は本当にお金がなく、食器は20個、小皿30枚、ざる20枚でやりましたので、お客さんを待たせてしまいました。こんなに並んでるのに何で母さんたち突っ立ってるんだ、稼いだらいいのにお客さんは思ったようです。稼ぎたくても稼げなかったんです。誰かが食べて立ってくれないとざるが足りなくて次のそばが出せないのです。こんな貧乏なスタートでしたが、だんだんお客さんが来てくれたおかげで食器も揃い、今では100人150人来ても大丈夫です。

うちは高校生から77歳までのグループです。今は70過ぎのおばあちゃんたちも若い人たちとコーヒーを飲むのが楽しくて来ています。うちはみんな日払いで働いています。6千円で1日働く人もいれば、朝早くから夜遅くまで8千円の人もいます。普通は4千円で、短い時間働く人もいます。ある日、おばあちゃんに年取ったからもう来られないと言われました。私は、ここは定年のない職場だから死ぬまでそばを打ってお墓に行こうねと言いました。そうしたらにこっと笑ってくれました。

うちは水車が宝物です。これで粉をひいています。自分たちでそばも栽培してそば

「まちづくり・仕事おこし」を考える盛岡市民集会

打ちをしています。長くやる秘訣は、本物でうそつかないことです。水が少なくなることもありますし、凍ることもあります。そんなときも私たちは何時間もかけてそばを作るのです。わざわざ食べに来てくれるお客さんにうそはついてはいけません。たった1回でも引き屋に頼んだら、うそのお店となり、今まで10年間も続かなかったと思います。いつまでも本物でいて、ありがたいという心で、地域に来てくれたお客さんに集落の紹介をしながらやっていきたいと思えます。

高齢者の仕事おこしと地域福祉

上町裕隆（岩手県高齢者福祉生活協同組合/事務局長）



高齢者協同組合は全国でいろいろな事業を展開しております。共通しておりますのは、ヘルパーの養成講座を開催し、その講座

を終了した受講生が中心となって訪問介護の事業をおこすということです。岩手高齢協でもヘルパー講座を毎年開催してきております。この講座は単に資格を取得するというだけでなく、人間の人生を考え直す機会となっていて、受講生から講座を受講して良かったという声が寄せられます。最近このヘルパー講座が変化してきています。

高齢協で講座を開催していた平成11年というのは30人ぐらいの定員でやっていました。その方たちの動機で一番多いのは、8割方が自分の家族のために受講するという人たちでした。仕事に結び付けたいという人は1割ぐらいでした。最近はこの傾向が全く変わってきておりまして、仕事にしたいという人が逆転して非常に多くなってきています。7割ぐらいの人が仕事をしたい、するために資格をとりたいのだといえます。今の世相を繁栄しているのではないかと思います。そういう人たちが集まって仕事おこしをしています。

高齢協では全国のいろいろな活動を進めています。東京では「葬送事業」「高齢者が歌う第九」、岡山高齢協では「高齢者の主張退会」、山形高齢協では「印刷事業」「送迎事業」といった高齢者の生きがいの事業を進めています。こうしたいろいろな事業がありますが、全国で共通しているのはやっぱりヘルパー事業をやりながら訪問介護の事業をスタートさせるという点です。

岩手高齢協では、「ゆたんぼ」「たんぼぼ」「ねんねこ」という地域福祉事業所を始めています。「ゆたんぼ」というのは訪問介護の

「まちづくり・仕事おこし」を考える盛岡市民集会

事業です。これは温かい気持ちでお世話をしようということで「ゆたんぼ」という名前になりました。「たんぼぼ」はケアマネジメントの事業で、居宅支援事業、ケアプランの作成を行なっています。ケアプランをいろんなところでお手伝いしながら、たんぼぼのようにいろんな地域に広がっていきということでたんぼぼとつけられました。「ねんねこ」は子育てサポート事業です。いま核家族が非常に多くなっています。事業をやっている、若いお母さんで育児ノイローゼになっている人が多いということがわかりました。

子供を幼稚園に送り迎えしてほしいというお母さんがいました。幼稚園はそんなに遠くなくて歩いていける距離で、仕事をしているわけでもありません。よくよく聞いてみると、送り迎えで友達のお父さんお母さんと顔をあわせるのが嫌だということです。昔であればおじいちゃん、おばあちゃんが一緒に住んでいてちょっとアドバイスしたり子供を見たりということがあったのですが、いまはそれがなかなかできません。そこで高齢協では子育てサポート養成講座というのを開催しました。

子育てを終わった人たちは、自分たちが子育てをしたときに、ちょっと子供の面倒を見てもらえると助かったなという経験をみんな持っています。今度は自分たちが1時間とか2時間子供を預かってあげることではじめてのが子育てサポートねんねこです。登録されている方が120人ほどいます。社会的に非常に必要な事業なのですが、始めるときに市内のアパートなどを

探しても、こういう事業をやりますという残念ながらもなかなか貸してもらえなかったりしました。今はサポーターの所有するマンションを借りたり、子供のうちに行って世話をしたりというようにして事業を継続しています。

ゆたんぼの事業を今は一番メインに行なっています。訪問介護の事業を始めて利用者が50人ぐらいになっております。新たに平成16年度4月には痴呆対応型のグループホームをつくらうということで準備を進めています。またもう1つは盛岡劇場のすぐ裏でデイサービスをやるうということで今準備を進めています。

高齢協ではこの地域福祉事業所が中心事業なんです、高齢者の生きがい事業として高齢者のための遊び塾というのをやっております。また入浴健康法アドバイザーの養成講座を開いています。これは高齢者の入浴での事故が多いためということから、正しい入浴の仕方をアドバイスしようという目的で行なっています。

あとはおばあちゃんの布絵教室というのもやっております。高齢になっても手先を動かすのは脳にも非常に大切だということがいわれています。あまった布をはさみで切って貼って絵を描きます。そして年に1回「おばあちゃんの夢布絵展」というのを岩手銀行中のギャラリーで開催しています。今年は1300人の来場者があって、新たに受講者も増えているということです。今年は「現代国際巨匠絵画展」というのをやりました。世界の名画を見て感動して絵を始めるのもいいだろうし、いろんなものに感動するの

「まちづくり・仕事おこし」を考える盛岡市民集会

もいいことなので、県民会館の展示室でチャリティーということで行ないました。これも1346名来ていただき、多数の絵も買っていただきました。

地域の人たちが支えあっていく場づくり

桂田静枝（労協一関地域福祉事業所 ケア・ホームなごみ / 所長）



「なごみ」は一関の地域福祉事業所のケアホームの桂田と申します。よろしくお願いたします。私たち看護師、介護福祉士、ヘルパーなど有志が集まって労働者協同組合の一員として思いをはせながら、民家の普通の一軒屋を借りて、平成11年に福祉事業所なごみを立ち上げました。それまでは病院や施設などで働いてきた人間が多いのですが、そこでの経験を通して、施設のあり方といいますか、閉鎖的であったり、入所している方々に対しての関わりに人間的なとこ

ろがなかったりということを感じていました。そこから飛び出した人間がなごみに集まりました。まずは1人1人の方とふれあいを大切にしたいということと、子供でも大人でもどなたでも立ち寄っていただける場所として、それからその中で職員だけでなく地域の人たちみんなで支えあってつくっていくことを目標としながらやってきました。

今やっと5年目を迎えました。当初は託児と宅老、子供さんから高齢者の方までわいわい来ていただくというところからスタートしました。なぜ子供と大人を交流させるのかというところには私も非常に思い入れがあります。子供と大人たちとの触れ合いを大切にしたい、そういう場所をつくりたいと思ってスタートしました。

私は簡単にデイサービスができるとは思っておりません。介護保険の該当となった方が自立に向かうような形をいかに私たちが関わっていけるかというところで、私たちは自立支援を目指しております。デイサービスにいらしている方の7割、8割の方は、介護度が良くなっています。寝たきりでどうしても起きられなかった方が今はご自分で歩いております。いらしたときに両方に杖を突いて歩いていた方が、杖なしで歩けるようになっています。

ご本人が生きているときに何が喜びで、そここのところに我々職員がどういう風な形でサポートしていくかということを考えています。介護度が良くなってきている方が増えてきました。介護保険には該当されていない自立の方の要介護にならない

「まちづくり・仕事おこし」を考える盛岡市民集会

元気づくりの活動をしながら、そこに子供たちも入ってきます。中には障害を持たれている子供がいたり、そうでない赤ちゃんが来たりします。ぽっと「元気ですか」ということで気軽にお茶を飲みに来てくれる近所の方もいます。そうやってなごみに足を運んでくださる方が増えてきて、今は人がたくさん出入りするの狭くなっちゃって、本当ににぎやかになっています。そんな開放的ななごみに来るのが待ち遠しいと言ってくくださる方が増えています。

そのうち地域の人たちがなごみを支援しようじゃないかという会をつくって、できるところを手伝うよと言ってくれて、送迎を手伝ってくださったり、自分の畑になごみ菜園というのをつくって野菜を届けてくださったりしています。利用者さんでなごみに行けると思うと畑仕事ができるんだと言って、自分がつくった野菜をどさっと持ってきてくれる方もいます。それをまたみんなで調理して分け合って食べます。1軒屋の中にお舅さん、お姑さんがいて、我々のような嫁がいて、お父さんのお母さん、孫が来たりというかたちで多世代交流が繰り広げられているという状況です。

我々も助成金をいただきたくて、何回も役所に足を運びましたがほとんど相手にされませんでした。ですから一切ないところからはじめました。熱い思いがあっても経営的に困難な面もありますが楽観的なところがありまして、なるようにしかならない、明日は明日の風が吹くと自分たちで思い込ませながらやっています。落ち込みながらも最後はみんなで笑い合っているというの

が毎日です。本当はすごい不安ですし、つぶれちゃったらどうしようとか考えています。でも簡単につぶしちゃうことは利用者さんもいらっしゃいますし、できないんです。上げた以上は責任があるわけです。

私たちにとって、利用者さんに元気になっていて、喜んでいただくことがまず1つの大きな目標です。そして私たちが本当に納得できる仕事をするということですから。やっぱりみんなでそれをつくっていくということです。なごみの職員だけではつくっていけないんです。なごみというところはみんなで支えあっていて、みんなですくられていると私は感じています。

一生懸命謙虚にやって自己満足かもしれませんが、ちょっと振り向いたらたくさんの方がなごみに来られて、その方々が励ましてくださったり、喜んでくださったりしました。その方々の笑顔によって、本当にたくさんの方の力と勇気をいただきました。一人の力は本当に弱いですが、たくさんの方の人たちが集まると怖さも半減して前に進められるような気がします。地域の方々の要望にいかに対応していくかということと、いかに関われば本当に元気になただけかということとを毎日毎日話し合っていて進んでいるところです。今後も私たちメンバーの夢も目標もありますし、喜んでいただけるようなことができる仕事につなげていくために、今後も取り組んでいきたいと思っております。

「まちづくり・仕事おこし」を考える盛岡市民集会

「協」の重層的なシステムを

斎藤倫史（元岩手日報論説委員）



今までお聞きした報告を聞きまして、みなさん元気に取り組んでおられるなと感じました。特に女性陣のパワーはすごいですね。今までお話をお伺いして思ったことは、大事なことはやはり生活者の視点を以下に継続させていくかということです。また活動していく中で地域の壁、障壁をどう取り除いていくかということも必要です。いろいろな見えない壁というものもあります。

デンマークにこんな人がいます。市議会議員で副市長でありながら、日頃は隣の市の市役所に勤めている女性です。それから、22歳の女子大学生で政治を勉強しながら市会議員になったという人がいます。これが日本だったらどうでしょうか。そんな人が市会議員であるはずがないという疑念の眼

で見られるというような感じです。

私は定年退職してもう3年近くなるんですが、デンマークの福祉を学ぶ会というのに関わっていて、去年の4月と10月、今年の2月に講演会とセミナーを開きました。今年のセミナーにはその2人の女性議員を呼んでお話を伺いました。向こうの話をいろいろ聞くと面白いですね。例えば結婚式。普通は教会ですが、向こうは市長が立ち会って市役所でやります。選挙権は18歳からです。ですから10代で国会議員にもなれるわけです。この22歳の方は、14歳のときから世界にこんなに貧富の差があるのはどうしてという疑問を持っていたそうです。そういうふうにして仕事を持って勉強しながら政治に関わっている、いわば生活者として政治を担っているということです。

「子育てと共働きを両立させたデンマーク」という講演の中で御茶の水女子大学の湯沢先生は、次のようなお話をされました。デンマークの女性が結婚に求める男性の条件は、4つあります。1つは、いわゆるいい仕事かどうかというのは問題ではない、きちんと仕事をしているか。2番目はきちんとした話ができる人。3番目は子供好きでいい父親になれそうな人。4番目はアルコールは少しはいいが、あんまり酒におぼれない。この条件が合えば、まあ結婚してもいいかなということなんだそうです。

日本の女性の場合は、10年ほど前に高収入、高学歴、高身長である3高というのがありました。中味とか個性、自主性といったものを見ないのかと思います。こうしたデンマークの姿から何が見えるのかといいます

「まちづくり・仕事おこし」を考える盛岡市民集会

と、性別とか年齢、社会的立場というものに影響されないということです。学校、職場、地域社会というなかで自由と行動を認めようとしているわけです。いろんな価値観、個人の違いがあります。そうした価値観を認める姿勢というのが感じられます。責任に裏打ちされた自由、そういう個人主義というものを容認している。その上で共通の価値観をつくることを積極的に努めていきます。

それでは共通の価値観って何かというと、連帯感とか共生感です。お互いさま、おかげさまという気持ちです。お互いに協力し合って助け合っていくこと。デンマークはなぜ福祉国家になったのでしょうか。その1つの力になったのは組合運動です。農業組合がその端を発しています。組合の中で困った人が出てくると、組合員みんなで助け合っていきます。ここにも連帯感や共生感があるのです。

それでは海の向こうだけがそういう考え方かということそうではありません。昭和の始めごろ、新渡戸稲造は協力の精神というのは産業組合にとって重要なのだということを言っています。昭和の初期というのは金融恐慌で国民の間にも閉塞感のような重苦しい雰囲気漂っているころでした。そんな中でこういうことを言っているわけです。昭和6年には岩手県の産業組合岩手支会の会長に選出され、その2、3ヶ月後に岩手支会の創立25周年記念大会で講演しました。「デンマークのように農家が耕地を持ち寄って規模拡大を図り、機械の導入を高めるようにするべきだ。」と述べています。いわば

協同の心の必要性を伝えているわけです。こうした協同の心がやはり日本には根付いていました。かつて我々の啓蒙の師が警鐘を鳴らした協同の心をもう1度思い起こして、今生きている我々がもう少し自覚を持って受け止めていくべきじゃないかと思えます。

労働者協同組合は市民発の仕事おこしのなかで地域福祉事業所をやっていて、その中でいろんな分野を超えて協同共生のネットワークを構築しようとしています。こうした活動はまさに地に足の着いた試みです。しかしこうした活動やコミュニティビジネスにも当然今までの先人たちの足があります。市民と福祉の接点の先駆けというのが当然あるのです。それをうまく継承してこなかった我々自身に責任があります。

自立して手をつなぎ合ってそして思いやる中に、誰もが安心して生きていくような社会が築かれるのだと思います。社会環境が大きく変化する中で、自らが自らの問題として社会参加していき、それぞれの人が持っている資源を有効に活用していくことが大切です。そのためには、これまでの公私という対立の関係ではなく、「協」を取り入れながら重層的なシステムにしていかなければなりません。いわば連帯、ネットワークしていくということ、多様な価値観の並列、共存を認めていくことが協働のシステムにつながっていくと思います。

「まちづくり・仕事おこし」を考える盛岡市民集会